

# 《楽曲解説》

解説＝野本 由紀夫

10/30 第871回サントリー定期シリーズ

オペラ  
シテ  
10/9オー  
チャ  
ト  
10/18サ  
ント  
リー  
10/30

モーツァルト(1756-1791)

## ピアノ協奏曲第26番 二長調『戴冠式』K.537

- I. アレグロ (約13分)
- II. (ラルゲット) (約6分)
- III. (アレグレット) (約9分)

モーツァルトの、最後から2番目のピアノ協奏曲。29歳の1788年2月24日にとりあえず書き上げられた。

2年前の1786年以降、ウィーンではモーツァルトの音楽にもはや飽きており、ピアノ協奏曲の予約を受け付けてもまったく客が集まらないありさまだった。オペラ『フィガロの結婚』K.492とそれに続く『ドン・ジョヴァンニ』K.527がプラハで大ヒットしたのも、ウィーンでの冷淡な反応の裏返しといえる。

苦しい経済状況のなか、何とかしてお金を得ようとして作曲したのが、K.537である。しかし、すぐに演奏会を開くことはできず、1789年4月14日、ベルリンへ向かう道すがらのドレスデンで初演されたらしい。

この協奏曲が『戴冠式』と呼ばれているのは、1790年10月15日に、レオポルト2世の神聖ローマ帝国皇帝への戴冠式を祝う演奏会で演奏されたためである。それとて、モーツァルトはレポルト2

世の同行一団には加えてもらえず、自腹を切って同行した挙句、聴衆の反応は残念なものであったという。

これ以外の点でも、この協奏曲は異例づくしである。ピアノ独奏パートの楽譜は、左手に音符がほとんど書かれていない。第2楽章に至っては、左手には何も書かれていない。今日ではたいてい、モーツァルトの没後、初版の出版時に(おそらく)ヨーハン・アントン・アンドレが補筆した左手パートで演奏する。

**第1楽章** 協奏曲風ソナタ形式の楽章。ギャラント様式によるピアノが華々しく活躍する。作曲家自身はカデンツァを残しておらず、本日もリリー・クラウスのもを使うそうである。

**第2楽章** ピアノ独奏で始まる緩徐楽章。簡明だが、室内乐的な色彩の音楽である。一部、即興も入れるそうだ。

**第3楽章** ロンド形式によるフィナーレ楽章。やはりピアノ独奏ではじまる。華やかな盛り上がりを見せて締めくくられる。

[楽器編成] 独奏ピアノ、フルート、オーボエ2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦楽5部

マーラー (1860-1911)

## 交響曲第1番 二長調『巨人』(国際マーラー協会全集新版)

- I. ゆるやかに、重々しく (15分)
- II. 力強く力動して、しかし速くなく (約8分)
- III. 荘重に威厳をもって、緩慢にならずに (約12分)
- IV. 嵐のように運動して (約18分)

第1番でありながら、完成した「交響曲」としてはじつは2曲目で、マーラーが27歳の1888年3月20日にいったん完成した「自伝的」な作品である。

じつは、完成直前の同年1月まで、マーラーは1886年末から1年あまりにわたって、ヴェーバー(1786-1826)の未完のオペラ『3人のピント』を補筆完成させる作業に追われていた。ライブツィヒ新市立歌劇場での初演(1888年1月20日)は大成功で、彼は指揮者・作曲家としての知名度が上がっただけでなく、収入の安定にもつながった。

その興奮さめやらぬなか、2月ごろから3月にかけてのわずか「6週間」で完成したのが交響曲第1番なのである。もっともそれは、『2部からなる交響詩』としての完成であった。その後、紆余曲折を経て、ようやく交響曲になった。

### ●「失恋」交響曲？

この交響曲が、ほとぼしるような興奮のなかで作曲されたのには、もうひとつ要因があった。「女性」である。作曲家ヴェーバーの遺稿を見せてもらうため

に、その親戚で所有者のヴェーバー大尉の夫人のもとへ足しげく通ううちに、マーラーと夫人は不倫関係に陥った。まさに「熱愛」であった。

それなのに、この交響曲は、全体としては「失恋」の色彩が強い。交響曲に引用された、原曲のきっかけとなったヨハンナ・リヒターにしる、ヨゼフィーネ・ポイスルにしる、けっきょく悲恋でおわっている。この交響曲は、「深く傷ついた心の叫び」の様相を示しているのである。その意味でも、この作品はマーラーの歌曲集『さすらう若人の歌』(1884-1896)と並んで「自伝的」あるいは「私小説的」な色彩が強いといえるだろう。

### ●改訂プロセスと「標題」の問題

最終的にカットされてしまったものの、交響曲『巨人』というタイトルは、再演のために改訂した「ハンブルク稿」ではじめて、ドイツ・ロマン派の作家ジャン・パウエル(1763-1825)の長編教養小説『巨人』(1803)から採られた。ジャン・パウエルといえば、シューマン(1810-1856)が心酔し、彼の音楽美学の根幹に影響を与えたことでも知られるが、マーラーも愛読していたのである。

小説『巨人』は、天才的だが奔放なアルバーノが、恋愛やそのほかの人生経験に鍛えられて、円満な性格の人間に成長していくさまを描いたもの。天才主義や巨人主義への批判も込められている。

●各稿の変遷とそのタイトル (作表:野本由紀夫)

1.ブダペスト稿 (1889年11月20日)	2.ハンブルク稿 (1893年10月29日)	(2'.)ワイマール初演 (1894年)	3.ベルリン稿 (1896年3月16日)	4.最終稿**** (1906-1907)	
『2部からなる交響詩』 Symphoniai költemény	『交響曲形式の交響詩「巨人」* <Titan>. Eine Tondichtung in Symphonieform		『交響曲第1番』 Symphonie Nr.1	『交響曲第1番』 Symphonie Nr.1	
第1部	第1楽章 ゆっくり/アレグロ・コモド	第1部 「青春の日々より(花の絵) <果実の絵> <いばらの絵)> **	第1楽章 「春、終わりのない!」 (序奏は早朝の自然の目覚めを描く)	第1楽章 (なし)	第1楽章 (なし)
	第2楽章 アンダンテ	第2部 「人間喜劇」	第2楽章 アンダンテ・アレグレット		
	第3楽章 スケルツォ		第3楽章 スケルツォ	第2楽章 (なし)	第2楽章 (スケルツォの表示さえなし)
第2部	第4楽章 葬送行進曲風に	第4楽章 「カロ風の葬送行進曲—葬送行進曲風の間奏曲」***	「帆に風をいっぱいはらんで」	第3楽章 (なし)	第3楽章 (なし)
	第5楽章 非常に情熱的に	第5楽章 「地獄から天国へ」****	「狩人の葬送」	第4楽章 (なし)	第4楽章 (なし)

\*ジャン・パウルの小説『巨人 Titan』(1803)による。 \*\*ジャン・パウルの小説『ジーベンケース Siebenkäs』(1796)に由来。  
\*\*\*E.T.A.ホフマンの小説に由来。 \*\*\*\*ダンテの『神曲』に由来。 \*\*\*\*\*国際マーラー協会による全集版には、旧版(1967年、エルヴィン・ラッツ校訂)と新版(1992年、カール・ハイント・フュッスル監修)の2種類ある。

マーラーは、おそらく交響曲全体の情熱的な愛を示唆するために、このタイトルを付けたのだろう。

いずれにせよ、マーラーがこの交響詩に『巨人』というタイトルを付けて演奏したのは、1893年のハンブルクと翌年のワイマールの、2回だけであった。1896年のベルリンでの演奏(『さすらう若人の歌』の初演日でもある)に際し、マーラーはもともとの第2楽章『花の章』をカットし、楽章にも付けられていたタイトルをすべて消し去った。最終的に1906年から翌年にかけて細部の手直しがなされ、最終稿となった。本日の演奏で使われるのは、国際マーラー協会から出版された全集版の新版(1992)である。

**第1楽章** 序奏部は、「キーン」と張り詰めたような弦楽器のハーモニクス(高次倍音を発生させる奏法)ではじまる。この箇所について、ワイマールでの演奏時には、「春、終わりのない!(序奏は早朝の

自然の目覚めを描く)」と、最終稿でも「自然の響きのように」と楽譜にあった。

ここで木管楽器に聴かれる「ラ ヲ ム」 「ファ ヽ ド」といった4度下降音型は、全楽章を通して現れる「基本モチーフ」である。狩りのイメージを表す、クラリネットの「狩りのファンファーレ」や、舞台裏のトランペットもかすかに聴こえる。4度下降音型は、やがてクラリネットの「カッコウ」になっていく。

カッコウのなかから、チェロ+コントラバスの主要主題が導き出される。二長調で楽しげに聴こえるが、原曲の歌詞内容は不安の影を伴ったもの。この呈示部は繰り返される。

ふたたび「自然の響き」となったところからが、展開部。室内楽的な書法で繊細に書かれている。大きなクレッシェンドのすえに、トランペットによるファンファーレが「発現」(パウル・ベッカーの命名)する。ここからが再現部。最後はティンパニ

で「4度下降音型」が連打されて、息もつかせずにおわる。

**第2楽章** 実質的にスケルツォ楽章である。低弦で歯切れよく「ラー ヽミ | ラ・ラー ヽミ」と、やはり4度下降音型ではじまる（「ハンスとグレーテ」のレントラー風の舞曲伴奏の引用）。木管楽器とホルンのベル・アップ（楽器本体を上の方にに向けて吹く）など、ステージ上の視覚効果も織り込まれている。最後は音階を激しく噴き上げるようにしておわる。

**第3楽章** 作曲当初より「葬送行進曲」のイメージをもっていた楽章。冒頭をコントラバス・ソロとティンパニ伴奏ではじめるのは斬新だ。ちなみに、1992年に出た『マーラー新全集版』では「コントラバス全員」と書かれているが、本日は「独奏」で演奏するそうである。

このソロの旋律は、民謡『マルティン兄弟』の引用である。これがカノンになって曲が進んでいくと、突如、場違いなパロディ風の軍楽隊が乱入する。ここは「シンバルを大太鼓に付けて、一人でたたくこと」と指定されていて、視覚的にも軍楽隊であることがわかる。

やがてハーブ伴奏による柔和な音楽となるが、これは『さすらう若人の歌』の第4曲「恋人の青い瞳」の「菩提樹」の部分の旋律がまるまよういられている。ふたたび葬送行進曲となり、静かに消え去っていくと、間をおかずにそのまま第4

楽章に突入する。

**第4楽章** ソナタ形式にもとづく楽章。ワイマールのときには、「深く傷ついた心の叫び」と書かれていた。絶望の底からトランペットとトロンボーンによる威嚇的なファンファーレが鳴り響く。この「ソ | ソーラー | ドー」にも「ソアド」という4度音程が含まれている。これはやがて主要主題に発展していく。

展開部の終わりに、第1楽章の狩りのファンファーレが金管によって勇壮に吹奏される。ここでほんの一瞬「あっ」と息を呑む瞬間を経て、ハ長調からニ長調に劇的に転調する瞬間がある。マーラーはこの部分をえらく気に入っており、「この交響曲全体で優れた部分があるとすれば、ここである」と述べていたほど。この直後、「自然の響き」のなかでは短調だった4度下降音型がニ長調になって、「楽園主題」として力奏される。

最後の最後、ホルン全員が「起立して吹く」ように指示されている。場合によっては、増員された第5トランペットと第4トロンボーンも起立させることがある。本日はどうするだろうか？ 曲は、ますます熱気を帯びて、喜びのうちにおわる。

【楽器編成】フルート4（ピッコロ持ち替え3）、オーボエ4（イングリッシュ・ホルン持ち替え）、クラリネット4（バス・クラリネットとエス（E♭）・クラリネット持ち替え）、ファゴット3（コントラファゴット持ち替え）、ホルン7、トランペット5、トロンボーン4、チューバ、ティンパニ（奏者2名）、大太鼓、シンバル、トライアングル、タムタム、ハーブ、弦楽5部

のもと・ゆきお（指揮・音楽学）／桐朋学園大学助教授を経て、玉川大学芸術学部芸術教育学科教授（音楽史、鑑賞理論、指揮法）。NHKテレビ「名曲探偵アマデウス」の元監修・解説者、同「ららら♪クラシック」のららら委員長、Eテレ学校番組「おんがくプラボー」番組委員（11月4日に指揮・編曲で出演）。10月11日に、世界的チェリストのG.カサド作編曲によるシューベルト原曲の「アルペジジョーネ協奏曲」を指揮予定。